

四、エレミヤとエホヤキム——神を知ることとは

正義を行なうことである（優先順位を変える）

エレミヤ書第二二章一三——一七節

「神を知る」ことは何を意味するだろうか。神を知っている人々とは誰のことであろうか。

この問いは簡単なように聞こえるので直ちに答えが浮かんでこよう。神を知っている人々とは神を経験したことがあり、それについて話のできる人々のことである。ある場合には彼らの話があまりにも安易過ぎたり流暢過ぎたりして十分説得力がないこともあるであろう。しかしまた、おずおずしてぎこちない語り方自体が、何とか表現しようとしているところの神との出会いの重大性と荘厳さを指し示していることもあるであろう。このような人々は、ある人物の前や日没の中、道徳的要求に従わせようとする脅迫観念の中や、宇宙の巨大さと自分自身の小ささを感じるとき、また聖書を読んだりイエスの生涯について瞑想したりすることによって、自分は神を見出

したと言うであろう。私たちが「聖者」と呼んでいる人々とは、しばしば神を知るとはこういうことに違いないと、明確なイメージを与えてくれる人々のことを指す。祈りと瞑想と善行による彼らの生活には澄み切った善良さがあり、神の御名と神の御心に対する彼らの訴えは確信に満ちて説得力を持っている。

このような人々とは対照的に、そのような主張を全くしない人々がいることを私たちは知っている。彼らは教会に行かないし、聖書を読むことも祈ることもしない。神という言葉がかりに彼らの口から発せられることがあったとしても、神を賛美することよりも腹立ち紛れの方が多いかも知れない。彼らの何人かにとっては神が問題となることは全くないし、神の現実性とか非現実性に関することでは心が掻き乱されることもないままで、ちゃんと生活が営まれている。中には二、三人の戦鬪的に神を否定する人々がいて、今なお神について肯定的な考え方をしている人々を馬鹿にする。無神論が彼らの「宗教」となっており、どうして他の人々は古びた神話に忠誠を尽くすほど愚かでいられるのかと不可解に思うのである。この他に神を意識的に捨て去った人々、大抵は思い悩んだ末にしかも悲しみの気持ちすらもって捨て去った人々がいる。彼らは信じたい気持ちを持っている。しかし神は彼らにとって以前は生き生きとしたものであったとしても、もはやそうではなくなってしまうている。こうした人々も模範的な生き方をしていて、隣人に対する

関心を持つているかも知れない。また貧しい人々や困窮している人々のために自分の身を粉にすることすらあるかも知れない。しかしもしや、「神を知っている」とは主張しないのである。

以上に述べたことはかなり当り前のことで、すぐにも同意していただけるかも知れない。しかし私たちがここで話をやめるとしたら、「神を知る」ことの意味について聖書的理解を著しく歪めてしまうことになるであろう。エレミヤ書の中には、「神を知る」ことを全く別の仕方で問う短い——しかも驚くべき——話が記されている。

聖書のテキスト エレミヤ書第二二章二三—一七節

「不義をもってその家を建て、

不法をもってその高殿を造り、

隣り人を雇って何をも与えず、

その賃銀を払わない者はわざわいである。

彼は言う、『わたしは自分のために大きな家を建て、

広い高殿を造ろう』と。

そしてこれがために窓を造り、

香柏の鏡板でおおい、それを朱で塗る。

あなたは競って香柏を用いることによって、

王であると思うのか。

あなたの父は食い飲みし、

公平と正義を行って、幸を得たのではないか。

彼は貧しい人と乏しい人の訴えをただして、

さいわいを得た。

こうすることがわたしを知ることではないかと主は言われる。

しかし、あなたは目も心も、

不正な利益のためにのみ用い、

罪なき者の血を流そうとし、

圧制と暴虐を行おうとする」。

読めばわかるように、記事全体を通してエレミヤは王を痛烈に非難している。それはすでにナ

タンの場合で見たように、預言者たちの得意とするところであった。エホヤキム（在位紀元前六〇九―五九八年）は、重要な改革を断行して多くの人々がその死を悲しんだヨシヤ王の子であった。おそらくそれがエホヤキムの問題の一部であった。しかし彼にはエジプトがもう一つの問題となっていた。国を統治し始めた頃、彼は南の強大なエジプト帝国の言いなりにされており、自国民から取り立てた税金の中からエジプトへの貢物を納めなければならなかった。

エレミヤを怒らせて、「……はわざわいである」という言葉を発せさせるとは、エホヤキムはどんなことをしようとしていたのだろうか。その答は非常に明白である。王は新しい宮殿を建造しようとしていたが、それは普通のありふれた平屋の宮殿ではなかった。二階建てで、色とりどりの窓と豪華なエアコン設備と一四台分のガレージがついていて、通常の必要をはるかに越える「広々とした」ものであった。地元の製材所で入手できる普通の松の鏡板を使用する代わりに、輸入して丁寧に製材される高価で貴重な香柏の木材で仕上げがなされるというものであった。またその宮殿は風景と調和するように柔らかな色で塗られるのではなく、派手なけばけばしい、人目を引く朱色で塗られようとしていた。

しかしこうした王の行き過ぎがエレミヤの大仰な攻撃の唯一の理由ではなかった。本当の問題は結果として、不要なものを作ることにあっただけでなく、宮殿建造のやり方が不正であったこと

4. エレミヤとエホヤキム——神を知ることは正義を行なうことである

にもあった。宮殿は「不義」をもって、高殿は「不法」をもって建てられようとしていた。エホヤキムは奴隷の労働力を用いただけでなく、労働者に賃金すら払おうとしなかった。王は富の頂点にいて、底辺にいる人々を搾取することによって、さらに巨万の富を築こうとしていた。それは私たちがすでに学んだエジプトの光景であり、登場人物はいささか異なっているものの、貧しい者がますます貧しくなる一方で、金持がますます金持になるという、言わば、今なお古典的な抑圧者—被抑圧者の図式をなしていた。

記事の最後のところで、エレミヤはエホヤキムを非難して、「(あなたは) 圧制と暴虐を行おうとする」(エレミヤ書二一・一七)とまで言っている。ここで用いられている「暴虐」というヘブル語 *חֲסִידוֹת* はとりわけ鮮明な描写を与えている。それは「押しつぶすこと、圧迫すること、打ち砕くこと」を意味しており、まさにエホヤキムの労働政策が成し遂げようとしていたことであつた。

エレミヤの冒頭の言葉は事態を簡潔かつ直接的に説明しているが、耳ざわりのよい調子で語られなかったことは確かであろう。「隣り人を雇って何も与えない者はわざわいである(王よ、誰のことだろう。何も与えないなんて考えられようか? 何もなしとは!)」(エレミヤ書二一・一二)。

やや熱気を帯びてきたエレミヤは痛烈な問いを投げかける——「あなたは競って香柏を用いることによって、王であると思うのか」(エレミヤ二二・一五)。あなたは宮殿を香柏の鏡板でおおって飾りたてれば、エジプトの使者が感心すると思つてゐるのか。一方で自国民が飢えて苦しんでゐるというのに、そんなことをしていくらかでもメンピスやテーベのエジプト王朝の点数を稼げると思つてゐるのかと。

そしてエレミヤは立て続けに気の利いた、しかし残酷なことを言う。彼は王をその父と比較するが、それは成人した大人には好まれない不愉快なこきおろしであつた。「あなたの父は食い飲みし、公平と正義を行つて、幸を得たのではないか」(エレミヤ書二二・一五)。この問いかけはいくつかの方向にメスを入れるものである。自分たちは王の父が「食い飲み」したことを知つてゐる——このことは、エレミヤが単に肉体的苦行をする禁欲主義者ではなかつたこと、それゆゑに彼のことを、まともに取り上げる必要のない非現実的な預言者として片付けてしまふことができないことを意味してゐる。しかしいくつかの注解書が示しているように、飲み食いに関する言及はヤハウェとの「契約の食事」のことも指しているかも知れない。父ヨシヤ王は「公平と正義」に関して賞賛されているが、「公平と正義」は契約の構成要素であつた。著名なユダヤ人学者マルティン・ブーバーはこう述べてゐる。「(ヨシヤは) 聖なる契約の食事にあずかり、ヤハウ

エとの契約をなした。この後彼は自ら公平と正義を実践し、人々に関しては貧しき者と乏しき者の訴えを弁護することによって契約を履行した」(*The Prophetic Faith*, pp. 162-163; Macmillan Co., 1949)。いずれにしても、「食い飲み」することは「公平と正義」を行なうことと正反對ではなく、相互補完的なものである。もしこれがヨシヤを特徴づけていたことであるならば、それは「不公平と不正義」によって宮殿を建てていたエホヤキムとはまさに正反對のことであった。それゆえにヨシヤが幸いを得たのに比べて、エホヤキムは幸いからは程遠かったことになる。

疑問の余地がないようにエレミヤは簡潔な平叙文で再度要点を述べる。「(ヨシヤは) 貧しい人と乏しい人の訴えをただして、さいわいを得た」(エレミヤ書二二・一六)。「公平と正義」を行なうことは、「貧しい人と乏しい人の訴え」を取り上げることと同じである。

エレミヤの評価によれば、エホヤキムは父親よりも数段低く位置づけられてしまうことになる。そんな評価を下されるだけでも、エホヤキムは手のつかまりどころも足掛りもないような近くの一番深い井戸の中にエレミヤを投げ込んでしまいたいと思ったに違いない。

しかしエレミヤはまだ言い終らなかつた。とどめの一撃をまだ食らわせていなかった。エレミヤは議論の筋道を反語の形にして、「公平と正義を行なうこと、貧しい人と乏しい人の訴えをたすこと。こうすることがわたしを知ることではないかと主は言われる」と問いかける。

主はこのように語られたのであって尋ねられたのではない。文章の形から見て肯定的な応答しか許されていない。第一の結論は、神を知ることが公平と正義を行ない、貧しい人と乏しい人の訴えをただすということである。そしてエレミヤは、エホヤキムがまさに正反對のことをなしていて、罪なき者の血を流し、「圧制と暴虐」(エレミヤ書二二・一七)を行なっているという結論を導き出している。それゆえに第二の結論は、エホヤキムは神を知ってはいないということである。第三の結論は(章の後の方に出ているが)、エホヤキムはとがを免れず不正義を行なったことによって没落するであろうということである。

これらの結論(特に、「神を知ることが正義を行なうことである」という結論)が恐ろしいものと映るか、それとも希望に満ちたものと映るかは、あなた方が「正義を行なっている」かどうかにかかっている。ラテン・アメリカ全域において、貧しく抑圧された人々はこの表現を取り入れ、政治的差別をはかる物差しあるいは希望のしるしとして用いている。神を知ることが正義を行なうことである。

神を知ることが(必ずしも)毎週日曜日にミサに行ったり、毎日祈りを唱えることではない。(必ずしも)使徒信条を憶えたり、悔い改めのわざを完璧に行なえたりすることでもない。これらすべてを行なうことができ、なおかつ神を知らないことがありうるのである。神を知ること

は、むしろ、「貧しい人々のために正義を勝ち取る」ことである。メキシコ人聖書学者ホセ・ミランダが言っているように、「ヤハウェは、隣人のために正義と憐れみを勝ち取っていく人間的行為の中においてのみ知られる」のである (Miranda, *Marx and the Bible*, p. 49)。それゆえに神を知ることが、エホヤキムの現代版を打倒するために政党に入って活動することかも知れない。貧しい人々を犠牲にして金持に特権を与えている経済的あるいは宗教的構造に対して反対を唱えることを意味しているかも知れない。また労働組合が非合法化されている地域で、労働組合に参加することを意味しているかも知れない。なぜならばそれ以外の方法によっては、貧しい人々が公正な労働条件や労働賃金を要求するのに十分な力を得ることができないからである。

それゆえにミランダは (キリスト者が用いているさまざまな抽象的概念に言及しながら) 続けて、神は『『本質的なもの (entities)』あるいは『存在しているもの (existings)』あるいは『第一義的存在 (univocal being)』あるいは『類比的存在 (analogous being)』の中に見出されるのではなく、むしろ正義への抗しがたい道德的命令の中において見出される』と言う (p. 49 若干変更して引用)。

ラテン・アメリカの小説家ホセ・マリア・アルゲダスは、小説『全ての血』の中で、さらにもっと生き生きとしたかたちで、「神はどこにもいらっしやいます」と流暢に語った司祭に対し

て、一人の聖堂係に答えさせている。

「ベジド先生は無実だった。先生を殺した奴の心の中に、神さまはいたんだろうか？ エスメラルダの畑をつぶす技術者の内に、神さまはいるのか？ ……あのすばらしいともろこし畑をインディオから取り上げた、おえらい旦那方の内に神はいたっていうんですか？」

（グティエレス、『解放の神学』、関望・山田経三訳、一九九ページから引用）

ここでも再度、問いは反語の形になっている。ただ一つ応答可能な答は、「神は勿論、そこにはおいでにならない！」である。神はそのような不正義の中で見出されることはないであろう。それでは、神はどこで見出され知られるのか。正義を行なうこと、貧しい人々の問題を自分自身の問題とすること、抑圧の制度を断ち切ること、犠牲者と共に闘いに参加してゆくことのおいてである。

考察と議論のための課題

これらすべてのことは私たちをどこへ導くだろうか。以下の諸提案は、読者がテキストに立ち向かって行くための手助けをすることが目的である。

1 「正義」とはいったい何か。抽象的な定義づけをするのではなく、正義を行なうことの具体例を示すことによって、聖書はどのように問いに答えようとしているかに注目しなければならぬ。それを私たちの状況に翻訳すればどうなるか。正義とは「すべての人にその受くべき分を与えることである」というアリストテレスの定義と、それに手を加えて、正義は「すべての子供にその受くべき分を与えることである」という身近な定義について議論してみよう。「受くべき分」とは何であるか。誰がそれを決めるのか。誰が「受くべき分」を与えるのか。個々人か。慈善団体か。政府か。すべての人は自分たちに保証された同等の権利を持っていなければならないのか。

2 もし「神を知ることが正義を行なうことである」ならば、「不正義を行なうことは神を知っていない」ということになるのか。

3 エレミヤ書の記事における状況説明は、私たち自身の世界の縮図でもあるということにあなたは賛成か、それとも反対か。エレミヤの時代と同じく今日においても、貧しい人がますます貧しくなる一方で、金持がますます金持になっているのは本当か。（事実——国連の「開発の一〇年」〔一九六〇年—一九七〇年〕において、豊かな国と貧しい国の格差を縮めるために特別の努力がなされたが、相対的格差は減少せず、むしろ拡大した。この時期、世界人口の約六パーセントを占めるアメリカ合衆国は世界資源の約四〇パーセントを消費していた。）

4 聖書記事の味わいを深めるためには、まず手始めに次の一例を用いて物語のいろんな登場人物の役割を演じてみるとよい。

エホヤキム——私に文句を言うエレミヤとはどんな男か。権力の問題性について何を知っているのか。宮殿の労働者への支払いにしても、一度でも貨金の支払いをしなければ

ならなかった経験があいつにあるのか。貧乏人はいつも出てくるもので、彼らは賃金の心配などしないで食物と寝場所があるだけで感謝すべきだ。「生活賃金」と称するものを払い始めた日には、経済が打撃を蒙るし、人々は投資を止めるし、労働者は休憩時間や組合や労災保険を要求するようになるだろう。誰かがエレミヤに損益計算の特訓をするか、さもなければ少なくとも、宗教と経済は関係がないことを教え込まなければならぬ。そして私の父のことを持ち出していることについては……。

エレミヤ——よいか、私はなりたくて預言者になつたのではない。弱者の側に立つて村の井戸に投げ込まれたりすることは、宮廷中の笑い草になるばかりか、おもしろおかしくもないことである。しかしそうすることが正しい道であるのなら、私はできるだけ正しく主の御心を伝えなければならない。それはエホヤキムにとって、絶えず悪しき知らせとなるであろう。なぜならば正義が問われているからである。もし「神を知る」ことを望むなら、燔祭や十分の一税をささげたり、ウェストミンスター教理問答を憶えたり、国家の首府における朝食祈禱会に出かけたりすることでは十分でない。それらのことは正義を行なうことに比べれば、何の意味もないことであり、不正義を覆い隠すものである時には、なおさらひどいこと

である。

労働者——「正義」とエレミヤは言うが、俺たちは正義についてはよく知っていないかも知れない。しかし不正義についてはたくさん知っている。俺たちを見てくれ。あいつらは俺たちをとことん働かせ、一日毎のノルマを設定し、さらに三週間毎にノルマを引き上げるんだ。俺たちが組織化しようとする、あいつらは組合のオルグを殴りつけたりする。俺たちが不平を言うと、こう言うんだ。「仕事にありつけただけでもありがたいと思え。大勢の連中は働いてただ食って寝るだけで感謝してるんだ。うまくやるにはどうしたらいいか考えた方がいいぜ」。

神「これは差し出がましいことも知れないが、エレミヤ書その他の聖書の記事から手がかりが与えられている」——結局のところ、私はあなたがた人間に自由を与え過ぎたのか。あなたがたは自由を悪用して、お互いにとってますますひどい事態を招いている。あなたがたはなぜ御言葉、すなわち、私の言葉を理解することができないのか。私はあなた方がささげる犠牲や「宗教」活動に興味がない。それらすべてが、あなた方の中に新しい垣根を作り出

しているように見える。私を「知る」ことを望むなら、互いに大切に合うことから始めなさい。そして公道を水のように、正義をつきない川のように流れさせなさい。私は、あなた方が兄弟姉妹に対して恨みを抱いたままで、祭壇に私のための供え物を持ってきたのを見る。そんな時、私はあなた方に大声で叫びたくなる。「頼むから、供え物を祭壇のそばに置き、行つてあなたの兄弟や姉妹と和解し、それから帰つてきて、私に供え物をささげることにしてくれ」と。それができた場合に私は喜んで供え物を受け入れよう。あなた方は、社会全体が民衆を圧迫して滅ぼしているというのに、私に賛美をささげたいようである。頼むから社会の犠牲者を搾取するのではなく、救済することによって私を賛美してほしい。民衆の協力を得て、まともな仕事、安全な労働条件、すべての人が尊敬されるような社会すなわち、エホヤキムがもたらしめているのとは正反対の社会を作り出すようにしなさい。もしあなたがたが本当に私を「知る」ことを望むのであれば、もうこれ以上搾取しないことである。

5 第三世界のキリスト者はエレミヤ書第二二章のような記事を耳にして、どのような反応をしているであろうか。コスタリカの聖書学者エルサ・タメスの言葉を聞こう。

今日、私たちは問いを発している。「抑圧的政権の指導者たちは、自分たちの全行動が生命の福音を否定するものであるのに、どうして聖餐にあずかることができるのか。大企業の株主や、生産手段を独占して労働者を徹底的に搾取する者や、人権を唱えながら同時に独裁政権に対する軍事援助の積み出しを承認して多国籍企業に門戸を開かせようとする者が、どうしてキリスト者という名前を主張しうるのか」(Bible of the Oppressed, pp. 79-80)。

この反応に対するあなたがたの反応はどうであろうか。